

## 特集

# 創り、支え、広げる「わたしたち」のくらし

民主主義とはどのような仕組みか、という問いに対して、すぐに思い浮かぶのは、おそらく「みんなで話し合って、最後は多数決で意思を決定する仕組み」とでもなろう。この回答が間違っているわけではないが、ここには民主主義の難しさも潜んでいる。たとえば、最後は多数決ということなのであれば、結局のところ「少数派」は「多数派」に常に従わなければならない。ところが、社会には当事者が少数しか存在しない事柄もある。常に「多数派」が意思を決定するのだとすれば、「少数派」となる当事者の意思はどうすれば社会に反映されるのだろうか。

現代の日本にも、こうした「少数派」の問題は、見えにくいだけで確かに存在している。異なる文化や慣習を持つ少数民族の人々や海外にルーツを持つ人々、セクシャル・マイノリティの人々、障害のある人々など、「わたしたち」の社会はのっぺりとした画一的な社会ではな

く、多様な人々が暮らす複雑な社会なのである。

そこで本号では、現代の日本で「少数」とされる当事者が、どのように暮らし、どのように社会と向き合っているのかを特集することとした。買物困難地域に暮らす人々、移民、留学生、アレルギーのある子と家族、そして障害者と支える人々。いずれも日本社会では「多数派」となり得ない立場の方々である。しかし、当事者自身で自らの生活を支える仕組みを作り上げ、それをさらに外へと広げようとする実践が広がりつつあることが、取り上げた事例から見えてくるだろう。

本特集を通じて、今見えている「わたしたち」のくらしが実は狭く限られたものであり、異なる「わたしたち」のくらしが隣にはあること、そしてそれぞれのくらしを結びつけることこそが、社会にとって大切であるということについて、改めて思いを馳せてもらいたい。

(本誌編集委員 加賀美太記)

1. コープこうべによる兵庫県小野市・市場地域買い物支援事業の展開と課題 (土居 靖範)
2. 地方都市に暮らす在日ベトナム人の食べ物事情—仕事や学校からはみえない暮らし  
(瀬戸 徐 映里奈)
3. 留学生の住・食・命 (防災) を支える大学生協の実践と国内外動向との連携 (朴 恵淑)
4. 食物アレルギーのある人もない人も—誰もが安心して過ごせる場を創る組合員活動—  
(原田 英美)